



## 古文学習の壁

前回の古文の授業の時に、  
「面影に花の姿を先立てて

幾重超え来ぬ峰の白雲」

という和歌を題材にして、「来」の読み方を問う問題を出した。どうやって答えを決めたか、説明し直せるだろうか。

まず、この問題を解く際には、以下の2点が理解・記憶されていないといけない。

【基本知識1】カ変の活用

こ・き・く・くる・くれ・こよ

【基本知識2】助動詞「ぬ」の識別

①完了の「ぬ」の終止形 \*連用形接続  
な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね

②打消の「ず」の連体形 \*未然形接続  
ず・ず・ず・ぬ・ね・○

これを当てはめて考えるわけだが、「来ぬ」の読み方を聞いているということは、「来」の活用が何形なのか聞いているのと同じである（未然形なら「きぬ」、連用形なら「こぬ」と読む）。

それを決めるには、下接している「ぬ」が何なのかを決めなければならない。「ぬ」が完了の助動詞なら、連用形接続だから「きぬ」と読むことになり、「ぬ」が打消の助動詞なら、未然形接続だから「こぬ」と読むことになる。つまり、この問題は「ぬ」の正体は何なのか、ということに帰結することになるのである。ここまではオッケー？

で、それを決めるには、完了なら「ぬ」は終止形だし、打消なら「ぬ」は連体形だから、この「ぬ」の活用形が何形かを決めればよいということになる。活用形を決定するには「下」(続き)を見れば良いわけだから、「ぬ」の「下」(続き)を見る。すると「峰の白雪」

となっていて、「峰」という体言が来ているから、この「ぬ」は連体形、つまり打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」であろうと判断できることになる。結果として、打消の助動詞「ず」は未然形接続だから、「来ぬ」は「こぬ」と読むことになる。 QED!

……となるはずなのに、そうならないところがこの問題のミソだったわけだ。ははは。

というのも、考える筋道としては上の通りでイイのだが、その結論として得られる解釈がおかしいからである。

この歌を冒頭から読んでみると、花の姿を目の前に想像しながら「幾重超え来ぬ」と続いている。そうすると、上述の解析でたどり着いた「ぬ」=打消で解釈した「花の姿を想像しながらいくつもの峰を越えては来なかった」というのはおかしいんじゃないか、と気づかなくてはならない。ここはどうしても、「いくつもの峰を越えてきた」と解したいところである。

\*

我々は「文法→解釈」という方向で問題を解くわけだが、ここについては、それを「解釈→文法」という逆方向から訂正することが求められている。その結果、結論としては「ぬ」=完了の終止形、よって「来ぬ」は「きぬ」と読み、この和歌は「四句切れ」であったということに決着するのである。

繰り返すが、ここでは「解釈→文法」というアクロバットをやっている。しかし、実際に解釈する際には、この方向で考えなければならない場合も多い。こういうところが、古文学習の壁と言ってもいいのである。